

激動の時代を生きた英雄たち
史実と文物が彼らの時代を物語る―



さいしきましやう 秦時代 前3世紀 秦始皇兵馬俑博物館蔵
弩をもって待機する姿が現された彩色の兵馬俑。保色に成功した貴重な1体を世界同時初公開

はじめに



『史記』は、前漢の司馬遷(BC145～BC87?)が著した中国最初の通史で、伝説の五帝から前漢の武帝までの歴史を著述した全 130 巻の大著です。日本でも、中学・高校の漢文や世界史で誰もが一度はふれたことがあり、歴史書としてはもちろんのこと、人生訓や処世術を学ぶ教養書としても読み継がれ愛されてきました。近年では、秦始皇帝の兵馬俑発見をはじめ、最新の科学調査で『史記』の記述に近い地下宮殿の存在の可能性が高まるなど、考古学と密接に関わりあいつながりながら中国古代の世界を明らかにしています。



本展は、『史記』を背景に、最新の文物資料を展覧して文献史学と考古学の接点を探り、新たな歴史像を示そうとするものです。春秋・戦国時代から、司馬遷が生き執筆した前漢・武帝までの約 700 年間(BC770～BC87 年)に焦点をあて、『史記』との接点となる各時代を代表する彫塑、装飾品、武具、生活用品、建築遺物など、日本初公開を多数含む 120 件組 200 点の厳選された文物資料を多角的に紹介します。



特に、剥落の危険から中国国内でも常設公開していない彩色兵馬俑(跪射俑^{きしゃよう})が、今回日本とドイツで世界同時初公開となります。これまで土色の世界と思われていた秦始皇帝の兵馬俑は、実は極彩色の世界でした。会場では、VR(バーチャルリアリティ)シアターで当初の鮮やかな彩色兵馬俑軍団の姿を再現し、現地では不可能な距離や角度から眺めることによって、その圧倒的なスケールを味わうこともできます。

始皇帝、項羽、劉邦、呂后、文景の治そして武帝の時代へ、中国の壮大なる歴史の一端をご覧下さい。

みどころ

彩色俑を世界同時初公開

1999年に発掘された彩色の兵馬俑を本展で初公開します。弩^{いしゆみ}をもって待機する姿が表現されたこの彩色の兵馬俑は、剥落の危険から中国国内でも未だに常設公開がされていない、大変貴重なものです。長年の研究成果により彩色の保護・定着に成功し、今回ドイツと日本での展覧が可能になりました。

『史記』を通してその作品が有する歴史的背景に迫る

今から2100年も前に書かれた『史記』は、古来もっとも親しまれてきた歴史書です。「先んずれば人を制す」や「背水の陣」といった数多くの格言は私たちの大きな指針となってきました。その基になった人間と王朝のドラマは、今でも私たちを惹きつけてやみません。本展では作品そのものの美術的、文化的価値を明らかにするだけでなく、『史記』を通してその作品が有する歴史的背景に焦点が当てられます。

大型スクリーンによる、バーチャルシアター

始皇帝陵を警備する地下軍団「兵馬俑」1号坑の姿を、最先端CGを駆使したバーチャルシアターで上映します。また、今回初公開となる、彩色兵馬俑の鮮やかな彩色をCGで復元し、兵馬俑坑が作られた2200年前当時の姿を細密な映像クオリティで再現します。

序章 史記

ここでは、『史記』と考古学の接点に基点をおく本展の序章として、今から 2100 年も前に書かれた『史記』と、著者である司馬遷を紹介するとともに、平安時代末期に日本で書写された貴重な『史記』断簡を初公開します。また、現在では失われた当時の竹簡を復元し、この大著の全貌に迫ります。

第一章 春秋・戦国時代

戦国時代は臣下が君主に変わって政治を行い、強国があいついで王となった時代です。小国で辺境の地にあった秦は、中華の国からは夷狄^{いてき}の国として軽視されながら、君主権力は強力で不動でした。展示物はこうした春秋戦国時代の秦の文物です。

秦は代々家畜を養い、馬を殖やし、西の覇者となりました。中原の文化を取り入れながら、西方遊牧民の素朴さをもち備え、さらに西方との交易の利も得ていました。今回出展される《金柄鉄剣》などの逸品からも、秦が決して辺境の小国家にとどまっていなかったことを感じさせます。またこの時代の《騎馬俑》は、巧みに馬を乗りこなした秦軍の兵士を想像させます。

また最新発見の文物として、現在も発掘の途中である始皇帝の祖母とされる夏太後の墓から出土した、貴重な帯鉤を3件展示します。



《金柄鉄剣》春秋 前 8～5 世紀
世紀宝鸡市考古研究所蔵



《騎馬俑》戦国 前 5～前 3 世紀
咸陽博物館蔵



《銅帶鉤》戦国 前 3 世紀
陝西省考古研究所蔵

第二章 秦・始皇帝の時代

始皇帝は、50 歳で亡くなるまでの前半 26 年は戦国秦の王として、後半 12 年は中国史上最初の皇帝として君臨しました。戦国時代の混乱を統一し、度量衡・文字・車軌の規格化、郡県制の実施などの統一事業を実施した君主として評価される一方、東方六国を滅ぼし、強権を発動して、焚書坑儒、長城建設を行うなど民衆を犠牲にした過酷な暴君としても位置づけられてきました。その始皇帝が生前みずから建設を監督したという陵墓が、1974 年に発見された兵馬俑坑によって世界の注目と関心を浴び、以来多様な角度から調査研究がなされてきました。

今回初公開となる 1999 年に発見された彩色跪射俑^{さいしき きしゃよう}（表紙）の展示は、その迫力とともに、今までの兵馬俑ではうかがえなかった彩り豊かな世界へと誘ってくれます。文官俑からは始皇帝の行政を支えた官吏の姿をうかがうことができます。また、水辺に群がる鳥の姿を模した水禽坑の発見によって、地下世界にも自然を意識した世界を再現していたことがわかりました。ここでは最新の科学調査による、驚くべき地下帝国の全貌に迫ります。



《跪》
秦 前 3 世紀
秦始皇兵馬俑博物館蔵



《文官俑》
秦 前 3 世紀
陝西省考古研究所蔵

第三章 漢 高祖・呂後の時代

高祖劉邦は、現在の江蘇省の沛県^{はい}で生まれました。秦が滅びるまでは沛公、その後、項羽との楚漢の戦いのときは漢王として行動しました。

司馬遷が『秦始皇本紀』と『高祖本紀』の間にわざわざ『項羽本紀』を入れたのは、秦を亡ぼしたのは項羽の楚であり、その楚から漢が出てきたことをいいかけたからです。項羽に関わる考古資料はほとんどありませんが、背後にあった楚の文化を示すものはあります。展示した楚の黄金貨幣がそうであり、漢代の女性俑に見られる腰の細い服装も楚の文化であり、楕円形の縁のある耳杯もそうでした。着衣式人俑も、木俑に絹の服を着せた楚の文化からきているのでしょう。



《陳爰金貨》
秦 前3世紀
西安市考古所蔵

項羽に勝利した劉邦は、はじめて皇帝に即位し、のちに高祖あるいは高皇帝と呼ばれました。その劉邦を支え、劉邦亡き後に政権を握ったのが呂后です。高祖が病になってから皇后として国政を任され、高祖の死後は男子を恵帝として即位させ、太后として政治を握りました。この時期の考古資料もそう多くありません。展示している「皇后之璽」玉印は呂後の陵墓の近くから発見され、呂后印とされている貴重なものです。また、漢代の彩色兵馬俑は秦代のように写実的ではありませんが、兵士の顔はあきらかに始皇帝の兵士俑の顔と異なり、江蘇省の沛県、豊県を中心とした劉邦集団の出自を匂わせています。



《“皇后之璽”玉印》
前漢 前2世紀
陝西歷史博物館蔵



《彩色騎馬俑》
前漢 前2世紀
漢陽陵考古陳列館蔵

第四章 漢 文景の治

文帝・景帝父子の約40年の安定した治世を文景の世と言います。文帝はのちに二四孝の一人に数えられ、3年も病床にあった母を、夜も眠らず、衣服も脱がず、薬は嘗めたうえでなければ勧めずに看病した孝行話はよく知られています。呂太后の死後、皇帝に迎えられ、身体の肉を削ぐ刑罰や田租の廃止、山沢の資源の解禁、穀倉からの貧民救済などの善政を行ないました。匈奴の侵入も和親策で乗り切り、内外の安定期でした。つづく景帝は、同姓の劉氏諸侯王の領地を削減したために呉楚七国の乱を招きましたが、諸侯王国の分封を許可した推恩の令を下してからは、安定した治世となりました。

始皇帝によって始められた帝王の陵墓制度は歴代の皇帝に引き継がれ、兵馬を模した兵馬俑は漢代の皇帝陵や諸侯王の陵墓からも出土しています。景帝の陵墓には4万点を超える人物俑、動物俑などが計画的に副葬されていました。



《金牌飾》前漢 前2-1世紀
陝西省考古研究所蔵



《彩色女俑》
前漢 前2世紀
漢陽陵考古陳列館蔵

第五章 漢 武帝の時代

呂太后の時代を一世と数えれば、武帝は五世となります。まさに司馬遷にとっては同時代であり、生没年もほぼ重なります。司馬遷は郎中、太史令、中書令として武帝という皇帝を絶えず見ていました。

武帝は前漢王朝樹立後、半世紀を経て即位し、即位期間も半世紀と長く、秦の制度を踏襲していた前漢前期の政治を大きく改め、内外に強力な帝国体制を固めました。この時代に、西域への道が張騫という一人の人物によって開かれました。今回展示している大きな駱駝の陶俑は漢代では大変珍しいもので、いわゆるシルクロードによって行われた東西交渉の象徴です。また《鎏金銀竹節銅薰爐》などの優れた工芸技術も武帝の時代を反映しています。



《灰陶大駱駝》
前漢 前2-前1世紀
西安市文物保護考古所蔵



《鎏金銀竹節銅薰爐》
前漢 前2世紀
茂陵博物館蔵



同左(部分)

VRシアターで体験する彩色兵馬俑

—現在と当時の兵馬俑の姿

VRとは「Virtual Reality(バーチャルリアリティ)」の頭文字をとった略称で「仮想現実」と訳されています。仮想現実の空間の中には、現実を超えた可能性が秘められています。まるでその場に居るような感覚から、実際には見ることの出来ない体験までを可能にする高度なデジタル表現を使った「映像表現技術」です。

展示会場では200インチ大型スクリーンに、秦始皇帝陵兵馬俑坑の8000体ともいわれる兵士や馬の現在の姿と、制作当初の色を鮮やかに再現した2200年前の兵馬俑軍団の姿を、圧倒的なスケールで再現し、御来場の皆様を「現在の兵馬俑坑」へ、そして「秦時代の兵馬俑坑」へ、時空を超えて御案内します。



VRによる当時の彩色の再現イメージ
©凸版印刷/TBS 2006